



● 一九二七 ● 參月版

中野勇雄
小林直人
壹篇 五篇

群杯乾

● 第八輯



笑つてゐる

中野 勇雄

笑つてゐる

人形のやうに鼻を指さして笑つてゐる
手をぶる／＼震るはして笑つてゐる

笑つて涙をすゝり上げてゐる

自殺！

顔

球

凹面鏡
凸面鏡
沼・射光

突突突突突突突突……………とゆく

喇叭は

劣情の集花だ

顔

刻一刻

こんなに素早く移りゆく光景があらうか

凝つと見てゐると

まばたきもしない自分の顔が

そつちの顔に壓倒されて

生硬な外皮の張りついてゐる巨大なモンスターの一部分になつてゆく――

元 明

手力男命

洪水のやうな元明だ

その明るさに失明した鶏群

はどたいて

開ける

生氣 生氣

馬
●
朝餐

(舊作)

草を食べるたびに

遠い世界がタンポポに揺れかゝり

齒に泌みる緑

緑色の食欲は霽に濡れてひろがる

一聲高くいなゝいて

惚れ惚れ自分を感じる――

朝露を拂つて

するする伸び上る タンポポ

グロリアスプロローグ

小林直人

砂ツバ。公園。舗道。貧民窟。飛行場。公衆食堂。救済病院。高架線……のやうな舞台である
星夜のやうな。暮春の午後のやうな色彩がむせつぽく千燭光のペーボアグロップで息づいてゐる

——觀衆の顔は吸血鼠の屍の毛並で　　眼は・黄ばんだブリキ罐レツテル模様で
へなく・と喘き喘えでゐる

[illegible]

——蒼白な神經衰弱な副音——
これは 舞台の全面に盛れあがつてゐる 最も効果をあげ得る近代的な教養と。思想と。訓育された衝動と。の軌音だ

綜合した交響樂

△「あゝ。月もない。星もない

ぬるくした腐魚の眼窩のやうな陰惨な深更に、あなたの古靴は五月の花のやうに多情だわ

B「真夏の海洋のやうにふくれ上つた戀人よ。私の酔しれた夜の革命狂想曲は

ホラ。御覽！死人倉庫のガラス窓にお前の首が凍りついてゐる！

C「あたし賣春婦よ。父こゝへいらつしやいね

後記・詩のこと 中野 勇 雄

詩は擴充しなければならぬ。

詩は今我々の目前に詩だとして提供されてゐるやうなものであらうか。

我々は概念と概念とで渾き集められた詩を採録する。

グループだけに依つて持ち上げられてゐる全ての詩が斷崖に投ぜられ、新しい、力そのものの詩が展開される日のあることを豫斷する。

詩はあらゆる容器とあらゆる形態とあらゆる思想とあらゆる生活とを必要とする。そしてあらゆる觀念とあらゆる偏見とを排斥する。それは一つへの意思であり、構成であり、混沌であり、飛躍である。

私は今詩心革命の途中にある。在石城の諸友からの批評と赤木健介君からの私信的批評とに感謝の意を表し一言前述した次第

昭和二年三月一日發行

東京 深川 扇橋町 一の一七
福島縣平町二の三〇

小 林 直 人
中 野 勇 雄

編輯者

小 林 直 人
中 野 勇 雄

發行者

小 林 直 人
中 野 勇 雄

印刷所

東京 浅草 馬道町 五の八

香 文 社